

# もみじ

—広島山岳・スポーツクライミング連盟会報—



一般社団法人 広島山岳・スポーツクライミング連盟

〒733-0011 広島市西区横川町 2 丁目 4-17

電話・FAX (082) 296-5597

E-Mail: [hgakuren@lime.ocn.ne.jp](mailto:hgakuren@lime.ocn.ne.jp)

URL: <http://hiroshima-gakuren.or.jp>

郵便振替口座 01380-6-37958

題字デザイン 今村みずほ

編集 西部伸也

本号内容

1. 寄稿『たわしのたわごと』
2. インターハイ (8/20~23 福井県勝山市) 報告
3. ありんこチーム山行 (7/17~18 三瓶山) 報告
4. 岳連短信

## 1. 寄稿『たわしのたわごと』

(理事長 豊田 和司)

「遅れて来た読者」たわしのたわごと

新緑

恵瓊 (えけい) 行くぞ

はい恵心 (えしん) 様

二人は安国寺を出発する

向かうは毛利元就の郡山城

恵心は元就の外交僧

だが恵瓊は

元就に滅ぼされた名門武田氏のプリンス

幼時落城する銀山城<sup>かなやまじょう</sup>から対岸の安国寺に逃れた

恵心様見事な新緑でございますね

恵瓊の心の中で何かが崩壊したのは

この時である

のち恵心の後を継いで

毛利家の外交僧として活躍することになる

恵瓊十八歳の春であった

一昨年 8 月の地平線報告会の案内で三宅修氏の「最初の合宿で谷川岳のマチガ沢を登り、雄大な風景を見ていた時“あの日”のトラウマがすーっと溶けていくような気持ちになりました。『ヤシの実の殻が壊れるような』感じでした。」が気になりました。当日の久保田賢次氏の報告 (地平線通信 485 号) 9 でも、「なぜか、ヤシの実がぱかっと割れたように、いやだという思いが消えた。山に戻っちゃった。」それに先立って、土合山の家で、「串田先生が、山の家的主人、中島喜代志さんと、「お久しぶり」なんて会話している様子を見て、「これは大変なことだ。ただの人ではない」と思ったという。三宅氏は、敗戦の年 8 月 5 日に、学徒動員の現場で米軍機に攻撃された列車の救助活動をしたことがトラウマになって、山から遠ざかりたい気持ちであったという。友人に懇願されて、名前だけ貸すつもりで山岳部員になったという。

さらに気になって、『雲をつかむ話』(三宅修、恒文社、1991 年) を入手して読むと、三宅氏が深く関与された雑誌「アルプ」300 号、終刊号に掲載された「アルプ夕映え」と題する随筆が収録されていた。終刊号まで秘められていた想い。以下引用します。

「串田さんが昔登っていたらしい」

いったい、この重大な情報を誰が持ち込んだのだろう。たぶん神が囁いたに違いない。こうして東京外語の山岳部は、串田孫一部長をいただいて出発した。それはとりも直さず、私の出発でもあった。昭和二十七年のことである。

この一年は事もなく過ぎた。

昭和二十八年五月。創部に参加したものの、相変らず山に向うと目まいのような不安を感じていた私は、大勢の中に入ることで少しもはずんでこない心を慰めながら、上越線土合の枕木のプラットフォームを歩き、山の家に入った。

その頃、今の高尾山のハイカー並の装備があったらどんなに良かったらと思うほど、私たちは山道具を持っていなかった。懐具合が、時には一食減らしても帳尻を合せにくいほど乏しいのと、登山用品そのものが乏しかったというのがその理由だった。

一行の中で、一人別格は串田部長だった。いかにも使いこんだナーゲル（鋏靴）やピッケル（山ノ内作）ニッカーホースにチョッキと上着。百鬼夜行のような一団に同行して、いささか参ったのではないかと思う。

土合山の家で中島喜代志さんと楽しそうに昔話をしているのを聞きながら、私たちはわが部長が山の世界でも只のネズミではなかった事ようやく気づき始めたのであった。

この日、天気はすばらしいの一語につきるほど晴れ渡っていた。仮眠してさっぱりした私たちは、噂にきく魔の谷川岳とはどんな山かと思ひながら出発した。

旧道を歩く。樹々の新緑が鮮やかなのに私は内心驚いていた。町の樹とまるで違うと思った。新緑を透して陽光がふりそそいでいる。何か心を揺り動かすものがあつた。

そして、道はマチガ沢に曲りこんで行った。プラチナのような発光体が若葉の向うできらめいていた。緑の炎が燃え上がったようであつた。それがマチガ沢を埋める雪溪だと判ってからも、私の心の中に若緑の炎があつた。

その時、突然、何か音が音立てて崩れたようであつた。山と私とを隔てていたものが、五月の谷川岳の光の中で、実にあっさり消滅していたのである。たぶん私は笑っていたらと思う。そうでなければ、その日、何も知らないままでシンセン尾根に登ってしまうような無茶をするはずもなかったのである。

(引用終わり)

安国寺に逃れた恵瓊が勉学に励む時、朝夕眺めていたのは銀山城のあつた武田山であつたであろう。なぜ彼は親の仇、毛利氏のために尽くそうと決めたのか。心の師（串田孫一）と新緑の取り合わせが、トラウマを破壊する威力があるのであれば、三宅氏の心で起きたようなことが、恵瓊にも起きたに違いない。それはどこで起きたのか。その場所を特定する旅に出た。

(以下次号)

## 2. インターハイ報告

(高体連 0B 西部 伸也)

8月20日(金)～23日(月)、福井県勝山市の三頭山(みつがしらやま)～大師山と取立山で第65回全国高等学校登山大会が開催され、広島県からは男子広島学院高校、女子ノートルダム清心高校が代表校として出場した。

コロナ禍で登山行動日が1日少なくなって日程が短縮されたり、テント設営はするもののテント内での宿泊や炊事がなくなるなど、異例の大会ではあつたが、大会は無事終了した。

広島県チームの成績のほうは広島学院が見事**6位に入賞**し、ノートルダム清心も1年生3名ながら**14位**と健闘した。

なお、大会の前日には全国委員長会議が持たれ、大会中も委員長シンポジウムが2回開催されて、現在の高校登山部が抱える諸問題、特にコロナ禍出の活動をどうしていくかということが協議された(いずれも美藤委員長と西部が出席)。

また、今大会には4年前に雪崩事故のあつた栃木県からは男女とも出場校がなかったのが気になったが(2年前の宮崎大会では多くの犠牲者を出した大田原高校が出場し、雪崩に埋まりながら救出された卒業生も応援に駆け付けていたのが印象的だったけれど…)、その辺の事情に着いても、当時の事故検証委員会のメンバーであり、今大会にチーム監督として参加していた長野県の大西浩さんから説明があつた。



8/20 開会式



8/23 閉会式での男子入賞校の表彰 (左端が広島学院)

### 3. ありんこチーム三瓶山行報告

(顧問・個人会員 岡谷 良信)

(先々月は) コロナ禍の中で広島県の緊急事態宣言もやっと解除の兆しも見えてきた。個人会員の方へ声掛けを行い、昨年来の計画であった、懇親会を兼ねた「今後の方向と皆さんの思いを語ろう会」を実施した。

島根県、三瓶山キャンプ場ケビンを予約し 7 月 17 日(土)に 12 名の参加者で大朝経由組と三次経由組で北ノ原キャンプに 15:00 集合。三瓶の細やかなレンタル品に感心しながら BBQ の準備と、今回も県庁山の会(マツダ 0B)の三村氏の鮎とジビエの差し入れに感謝して BBQ を囲みながら、今後の個人会員&ありんこチームの方向性と登山への思いを話しながら、あつという間の 6 時間余りの懇親会を終えて心地よく就寝。

18 日、今日は雨を覚悟の山行に成るかと思いつきながら、朝食とケビンの掃除を済ませて、定め松(西ノ原)に移動 7:00。「今日も自分が居るから雨は降らん」と冗談混じりに言ったものの、どしゃ降り状態「あちゃ〜」…晴れ男もおお外れ。

三瓶山周回山行で結構ハードな 1 日になりそうなので、ゆっくり、じっくり歩きでメンバーの様子を見ながら登る。草原を抜ける頃には雨も小雨、暑さに耐えられず、温度調整。雨も回復、男三瓶に向けてのジグザグ道を足もとの花に元気をもらいながら登る。眼下に西ノ原の草原が地上絵の様で美しい。1000m 付近からの急登、喘ぎ喘ぎの登り。そろそろ体力の差が出てくる頃、右手には子三瓶の縦走路が綺麗に見えている。

急登を終えるとススキの草原に出る。この辺りは雪山シーズンにはホワイトアウトに成るとまったく方向感覚が無くなる場所である事を認識して頂きたい



8/21 三頭山への登山口となる平泉寺を通過する ND 清真



テント内での就寝はないが、設営審査はある



8/22 取立平避難小屋前を通過する広島学院と応援の委員長隊

所である。

雨もやみ、頂上到着、水分補給と軽く行動食をほおばり、避難小屋を覗く。避難小屋のメモ帳に付いてのワンポイント「必ず自分が歩いた軌跡を残すために記入する」(遭難の際の重要な手掛かりになる)事を説明し、女三瓶ルートへと下山。崩落して通行禁止も少しずつ回復している様子だが、まだまだ敬遠されるルートになっており、若干荒れたコースになっている。

2名が疲れた様子なので、エスケープルートを考えながら女三瓶で休憩。東の原へのエスケープ用に、ピックアップ車を回していたが、短くしたルートもいかと判断して、孫、子三瓶周回組と、室内池に分かれてのコースを選択。久しぶりに通る室内池コースのかしわの木が大きく樹勢しているのに驚かされた。

コースが短くなったので安心したのか思いのほか元気に歩いている。子三瓶と男三瓶のコルで周回組を待つ。日陰で肌寒いので子三瓶の下まで迎えに行く。ベンチに寝転んでいたら眠ってしまったようだ。皆の声で目覚める。気持ちいい眠りでした。

2:30 皆疲れた様子もなく全員集合。コルからは下るだけだが結構長い。途中登ってくる身軽な若者たちとすれ違う。この時間から…? 「何処まで行くので…?」 — 「男三瓶まで」 — 今から…? 「気を付けてね」でお別れ。

ぽりぽりと雨が降ってくる。今日は 100% 雨を覚悟の山行が 90% 降られなかった。三瓶の花ユウスケも残念ながら雨のためお休み。車に着くころはどしゃ降り状態、先程の若者の動向を心配しながら、三瓶温泉で汗を流して帰宅の途に、皆さんお疲れ様でした。

又を楽しみに。



#### 4. 岳連短信

##### 1. 寄贈御礼

三原山の会『筆影』No. 498 (9月号)

福山山岳会『会報』R3. 9月号

広島山岳会『山嶺』第 873 号 (R3. 8月)

広島やまびこ会『やまびこ』780

広島山稜会『峠通信』第 746 号 (8月)

『中信高校山岳部かわらばん』696・697 (8/25)

##### 2. 写真展および山岳SCセミナー中止のお知らせ

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言の延長が見込まれたため、9/14~19 の写真展と 9/25 のセミナーの中止を 9/8 の運営会議で決定しました。写真展は 2/22~27 開催で再申込をすることに決定し、セミナーについては、運営会議後の関係者の協議で 3/27 に延期されることになりました。

#### 編集部より

○この会報は、皆さんの提出原稿を編集して発行しています。岳連行事・山の情報・行事参加の感想など気軽にお寄せください。寄稿の場合は所属、役職を記入下さい。編集の都合で一部手直しすることがあります。ご了承ください。

○会員団体会報発行されたら岳連事務局まで恵送下さい。随時紹介します。

○この会報はメール配信しています。配信ご希望の方は岳連事務局までメールアドレスをお知らせ下さい